



空間がステキ。絵本の中にいる気分で癒されました。  
生演奏とってもステキでした。  
子どもが自分のペースで楽しんでいる姿に喜びを感じました。  
ビルの中にいる大人に自然を感じさせてくれてありがとう。  
恥ずかしがり屋の子もちゃんとそこにいて、自分をあらわす心がステキです。



とっても素敵で涙が溢れました。  
一人一人に寄り添って、その子の様子を見ながらかかわっていらっしゃるのが  
とてもよく伝わってきました。  
私は特別支援学校の教員（音楽）で、このような授業をしたい！ と  
ずっと試行錯誤していました。とても参考になりました。私の子供たち、生徒たち  
にも味あわせてあげたいです。本当に心温まる時間でした。

# THEATRE & POLICY

No.134  
September 2022

特定非営利活動法人  
シアタープランニングネットワーク

〒206-0033  
東京都多摩市落合 6-13-9-203  
Phone & Fax 042-316-9392  
Mail [tpp1@msb.biglobe.ne.jp](mailto:tpp1@msb.biglobe.ne.jp)  
<http://www5a.biglobe.ne.jp/~tppn>



「迷いの森」 沖縄公演から  
ホスピタルシアープロジェクト



Photos by 守礼写真館

## 生まれた奇蹟、これから生まれる奇蹟。

これまであえて劇場での上演を避けてきたホスピタルシアタープロジェクトが、りっかりっかフェスタに協賛する形で、劇場空間で初めて上演することになった。専任の舞台監督もテクニカルスタッフもいないカンパニーにとって、事前にテクニカルライダーという名の仕様書をきちんと用意することなどできるはずもなく（6月に来沖し、少しばかりどういうものなのかは対面で打ち合わせはさせていただいたため）、前の利用者がはけたあと、カンパニーメンバーがああでもない、こうでもない、こうすべきだと議論しているのを、プロのテクニカルスタッフが私たちを遠巻きに囲みながら、忍耐強く「待つ」というかなり異例の仕込みが始まった。いったんカンパニー側の意見が統一されると、あとは見事なまでに、むしろ私たちが思っていた以上の空間が現出することになった。マジックだと思った。初めてプロの舞台監督が寄り添い、プロの照明スタッフが繊細な調整をしてくれる劇場空間に身が引き締まる思いがした。

そもそも「こんな時期に」「無理してまで」やるべきなのは、何度も考えた。その思考に追い打ちをかけるように、一足先に沖縄入りした私のところに届いたのは、ピアニストのコロナ感染の一報だった。「やっぱり無理だったのか」と言葉にはしないものの、何度もため息をつきながら、対処を探った。音楽チームのリーダーのバイオリニストは、代役のピアニスト候補を探しながらも、東京で自分一人でもやり遂げる覚悟をもって、選曲の変更作業を始めた。沖縄入りまで1週間を切るなかで探すのは不可能なビジネスと言わざるを得なかった。りっかりっかフェスタに参加しつつ、参加申込者に事前のコミュニケーションをとりながら、沖縄の地でも代役を探しはじめたが、元よりつてがあるわけではなく諦め始めていたところに、朗報が飛び込んだ。ボランティアスタッフとしてここ何年か参加している女性が「音大卒です。できるかも…」と名乗りをあげてくれた。早速、バイオリニストと直接電話で話してもらい、どのような曲を弾くのか等を説明し、「やります」。その勇気と度胸に感銘するともに感謝したいと思う。すごいのは、りっかりっかフェスタのスタッフは、今度はその彼女の本来の仕事の穴を埋めるべく、そそくさと調整をしてくれたことだ。通し稽古、仕込み、本番のみならず、ピアノの稽古時間の確保まで尽力してくれた。りっかりっかフェスタ恐るべし。

想像していた以上に多くの観客を迎えることができた。車いすやバギーの子どもも少なくなかった。吸引を必要とする子どももいた。色々な子どもたちが集うことで、毎公演、様々に、そして、劇的なまでに変化した。とりわけりっかりっかフェスタが育んできた那覇の子どもたちの反応はヴィヴィッドで、たくましい。観客がパフォーマンスの最も重要な要素なのだということを（演劇学の基本中の基本なのだけれど、観客論はきちんと教えられることはない…）実感することになった。

しかし、いわゆる「水際対策」として、いまだなかばコロナ鎖国が継続されているために海外からのゲストが来日できず、海外のプレゼンターたちに見ていただく機会を得られなかつたのは残念なことだった。それでも、多くの関係者に足を運んでいただけたことに感謝したい。2度観てくれた方もいた。

興味深かったのは、若干名ながら、通常、フェスティバル作品をほとんど観ることのないテクニカルスタッフが見学に来ていたことだ。また、公演中、私の隣に座り、数少ないキーで照明を操作する – だから、時間があったわけだが – 照明スタッフが、自らのスマホで写真を撮っている瞬間を目の当たりにし、どこか「やったぜ」という気分になった。りっかりっかフェスタを支えるテクニカルスタッフは、全国から集められたプロフェッショナルたちだ。彼らが自分たちの町に彼らの見た

インクルーシブの実践の一端を持ち帰ってくれたらと願う。そこから新たな奇蹟が生まれるかもしれないからだ。

インクルーシブシアターは、必ずしも障がい児や医療的ケア児のためにのみデザインされるものではない。誰もがその人なりに楽しむことができるよう楽しむ方を選択できるように、パフォーマーたちは反応し、仕掛けていく。時に、理屈なしに健常の大人たちをも巻き込む。一種のイマーシブ（没入型）で、インタラクティブ（相関型）な演劇体験なのである。しかし、遊びに走り過ぎると、パフォーマスとしての美を損ないかねない。イマーシブでインタラクティブであり続け、同時に、演劇としての美をいかに確立していくのかが実は、大きな課題である。また、作り込み過ぎると、インタラクティブ性を失い、観客の本質的な参加を規制するものになりかねないことだ。すべての子どもたちが、それぞれの「生命」の「ライブ性」をパフォーマンスの中に持ち込む。そこにこそインクルーシブの本質があるのだと思う。

当日キャンセルになった障がい児の家族の代わりに、二人の文化経済学者が参加した。その著名な文化経済学者がその体験を「夏の夜の夢のようだった」とコメントした。インクルーシブシアターには、障がい児以上に、どうやら大たちにとても必要なものがたくさん内包されているようだ。

（中山夏織／プロデューサー）

#### オンライン・セミナー

### スコットランドの事例に学ぶユースシアターの活動と可能性＜要約＞

人口 530 万人のスコットランドでは、学校ではない場所で、児童青少年が演劇を学ぶ「ユースシアター」の活動が大小 300 団体／350 会場で展開されています。8月3日、子どもたちの成長を支える活動の内容や、社会的背景を踏まえたお話を、エキスパートであるお二人から伺いました。

#### ユースシアター「ストレンジタウン」について

スティーブン・スマール：ユースシアター「ストレンジタウン」では、学校がある時期には、年間を通して 1 週間にだいたい 11 クラス行います。特徴的なのは、脚本家たちに委嘱することで特定の年齢層のための作品を作っているところです。エジンバラの劇場で公演を行います。

Q. 何歳の子どもたちが参加していますか？

A. 通常クラスは 8 歳から 25 歳まで。パンデミックが始まってからは上限が緩くなって、パンデミックによって参加の機会が失われた 27 歳くらいまでが参加するようになりました。8~10 歳、11~14 歳、15~18 歳、19~25 歳というようにグループ分けして活動しています。1 グループの人数は、パンデミック前は 25 名でしたが、パンデミック後は 20 名に制限しています。

Q. 子どもたちはどのくらいの参加費を払っているのでしょうか？

A. 期間が異なるので幅がありますが、1 学期につき 7 ポンド（16500~17000 円くらい）。払えない人たちのために「アクセスファンド」という補助金があり、そこからお金をだすことができます。ストレンジタウンのクラスに参加することは、経済的には難しいことではないのですが、私たちが拠点としているのはエジンバラのリースという裕福ではない地域だからです。

Q. 子どもたちはどのような目的で参加しているのでしょうか？

A. それぞれ参加の目的は違います。その中でも、俳優になりたいと思っている若い人たちは少ない。多くの人たちの目的は「出会い」です。そして自信をつけたり、社会的なスキルを身につけたいということがあります。みんなで作品を作る中で、チームワークや、時間通りに集まるなど、一緒に活動する。2 時間スマホを手から離す。何よりも楽しむ。素晴らしいのは、最後に彼らがやってきたことを、家族や友人に見せることができる。『クラスに参加すると自分自身でいられる』と若者たちは何度も言い

ます。私たちがやっているのは、そういう若者が毎週やってきて、自分自身になれる安全なスペースを作ること。特にパンデミックを経た今、より重要なことだと感じています。

Q. どんな人が指導にあたっていますか？

A. キャリアを始めたばかりの人たちに機会を与えよう、ということをしています。今、フルタイムのスタッフは少なくて、5名です。9月の頭からスタートした人たちが13名います。脚本を書いてくれる作家が6名。我々の団体で仕事をしている人たちの多くが20代です。フリーランスの素晴らしいチームもあり、パンデミック後も仕事を続けてくれています。そのうちの多くが関心を持っているのが、演出です。彼らには他の仕事もあります。

Q. これだけ多くのスタッフを、どのように経済的に支えていられるのでしょうか？

A. 学期ごとに報酬を払っています。トレーニングも提供しています。最近は応急処置のトレーニングを行いました。学期の最初か最後に、ソーシャルイベントというような集まりをしています。エジンバラのフリンジフェスティバルをみんなで観に行って、その後食事をしたり。毎週金曜日に今後の予定などをニュースレターのような形でメールします。それが、フリーランスのスタッフに対して行っていることで、フルタイムのスタッフとは毎週ミーティングを行っています。

Q. 公的な支援は得ていらっしゃいますか？

A. 約4年間にわたってエジンバラ市の支援を受けていましたが、パンデミックが始まる1ヶ月前になくなりました。去年6月公演は、クリエイティブスコットランドから支援をいただきました。それがパンデミック後の初めての公演で、まだパンデミック下での公演の条件が続いている舞台に立てるのは6人まで。それ以外は映像や音声です。今、来年の6月に計画している公演のために、クリエイティブスコットランドの申請準備をしています。財政的には確かに大変ですが、不思議なことに、パンデミック以前よりは少し良くなっています。生き残っていくための政府の補助金も出ていて、そこから活動することができます。

Q. 非営利団体なのですよね。非営利の団体が子どもたちのエージェントの役割もしているのがユニークだと思いました。

A. エージェントの活動を通して得た収入が、カンパニーの活動のための資金になっています。保護者の方から提案されたのがきっかけで始まりました。子どもの出演者を探している広告や公演は多いですが、支払いを求めた瞬間に、それは必要ないだろうとなってしまう風潮がありました。エージェントの活動は10年くらいかけて作ったもので、フルタイムスタッフが2名関わっています。パンデミック下において、活動をやめなかつた部門の一つです。

Q. 指導者の方がキャリアを始めたばかりの方が多いということに驚きました。指導者を指導する方はどんな方が、どのくらいなのでしょうか。

A. 2名チームになっていて、経験のある人をリーダーにして、そこに経験がまだない人をアシスタントとしてつけます。リーダーがいなくなったら場合は、今までアシスタントだった人がリーダーになります。さらにユースシアターマネージャーがユースシアター全体を見てくれています。私自身も全体を見ています。この間の6月の公演でどうだったか、全てのスタッフと面談しました。フリーランスの中にはもう5年以上我々と活動している人もいます。リーダーのうちの一人は、ユースシアターを始めてもう14年になります。1グループにつき、指導者1チームです。例えばある人は、火曜日の14~18歳のクラスと、金曜日の8~10歳のクラスも担当しています。週に1回、2時間のクラスがあります。8~10歳のクラスは1時間半です。

Q. 俳優になることを目的としたクラスではないと思いますが、どういったことをするクラスなのでしょうか？

A. 私が言おうとしていたのは、私たちのミッションは、俳優を育成することではないことです。俳優をたくさん作り出してもそこに十分な仕事はありません。ですが、もちろん彼らの家族や友人が観にくる公演は、できるだけレベルの高いものを作ろうとしています。なのでクラスの中で演技のトレーニングもあります。クラスではまずウォームアップをして、ゲームをして、脚本の稽古をします。最後にウォームダウンのためのゲームをしたりして、終わります。グループによっては、2時間ゲームしたいというグループもあります。グループのみんなに、どんな作品をやりたいか聞くと、彼らは絶対にシリアスなやつだといいます。それがどういう意味なのかはいまによくわからない。みんなお客様の前での公演は大好きなので、それが私たちが成功できている秘訣かと思います。

Q. 学校のドラマティーチャーとの連携はありますか？

A. あります。エジンバラの学校はすごいプレッシャーの中にあります。エジンバラ市内の学校のドラマティーチャーと定期的にミーティングを行いますが、そこで常に伝えているのは、我々がどれだけのことを若者に届けることができるかということです。今、9月10月に市内の学校をツアーブラントンする新作があります。市内の3つの地域の中学校・高校と強いつながりがあります。

Q. ロンドンオリンピックの時のアンリミテッドプログラムがありましたが、それが今も継続されている場合に、その枠組みで助成金を受けることはありますか？

A. 今はやっていません。クリエイティブスコットランドの予算もかなり縮小されています。

## トゥーンスピーク・ヤング・ピープル・シアターについて

レイチエル・スミス：今日はトゥーンスピーク・ヤング・ピープル・シアターでの6年間の活動を中心にお話しできたらと思います。最近はエアリアル・エッジというサークルで戦略ディレクターとして活動していました。

Q. 特徴を教えていただけますか？

A. 2012年にこの仕事を始めた時には、グラスゴーの12の地域で毎週12クラスを行っていました。年3回ほど、小さな公演を行います。夏休み期間に、関心のある人たちが集まり、より大きな企画に関わります。活動していたのは、社会的にあまり恵まれていない地域でした。ずっと参加してもらうこと、関係を保つことがかなり難しい地域でした。クリエイティブラーニングディレクターとして最初の3年で行なったのは、より幅広い機会を提供することでした。まずは仕事につながるようなことをする、精神的な健康をサポートする、ということにフォーカスしました。それによって、創造的な芸術活動を通して、若い人たちの成長をより支える地盤ができました。芸術監督になった後は、若い人たちが何を成し遂げたいか、私たちとどう成し遂げたいかということに対してより野心的になりました。若い人たちとコンサルティング・イベントという名のパーティをして、彼らがインプットしたものに対してきちんとお返しができるように、ということを意識していました。彼らは毎年、ミュージカルがやりたい、と言います。かなり大きなプロジェクトになり、クリエイティブスコットランドからの助成を得て、グラスゴーのトロンシアターで公演をすることができました。それは団体にとって一番大きな規模の公演となりました。毎週のプロジェクトの参加者だけではなく、就職支援やメンタルヘルスのクラスの参加者も参加してくれました。バックステージにも同じように関わってくれました。このプロジェクトを通して、いろんな入り口からプログラムに関わってもらうモデルができました。若い人たちの関心に合わせて、団体が何を提供できるかを考え、それが我々の団体の長期的なプランになりました。我々の団体の運営体制として、12名の理事会がありますが、その半数はこれまでのプロジェクトに参加してくれた若い人たちです。

Q. 社会経済的に恵まれない地域の子どもたちは、参加費を払っていますか？

A. 彼らは何も払っていません。移動手段や食事も提供します。

Q. 障がいを持った方も参加していますか？

A. もちろんいます。私たちの理念として、経済的なバリアも身体的なバリアもない活動を目指しています。

Q. 障がいを持った方を受け入れる際に、専門家はいらっしゃるのでしょうか？

A. 非常に重度な精神的な問題がある方や、グループワークに参加できない方との活動の場合は、1対1で活動できるような専門家に入ってもらうことがあります。例えば、グループで、もしくは1対1で、クリエイティブセラピストと活動することもあります。深刻な身体的な障がいがある方が参加される場合は、通常は付き添いの方が同行してくることが多いです。グラスゴーコネクテッドアーツネットワークから参加型の助成を受けていました。グラスゴー中の数百人のメンバーが関わったもので、立ち上げからボランタリーディレクターとして関わっています。

Q. 地域のユースワーカーやソーシャルワーカーとの連携はありますか？

A. 一緒に活動をしています。あまり学校に行けていない子どもたちに、地域のユースワーカーたちが私たちの活動を一つの選択肢として伝えてくれます。職業を斡旋してくれる施設から、仕事がないような若い人たちを紹介していただくこともあります。

\*\*\*\*\*

Q. 助成を受ける際に、評価指標はありますか？

レイチエル：たくさんあります。例えばトゥーンスピークでは、1年に30くらいの助成団体に申請するのですが、社会包摂的などころにかなり厳しいガイドラインを求めてきます。スティーブも同じ印象ですか？

スティーブ：プロセスがうまく機能していない感じがある。長い時間かけて申請しなければならないのに、そのプロセスやゴールがきちんと共有されていなくて、一つの共有された目的のためにお金が使われるということになっていないために、それに対して成果や価値を書かなくてはならない。評価にすごく時間を取られてしまいます。

Q. 僕は中学生や高校生と脚本を使わずにデバイジングをすることが多いのですが、僕の生徒たちはエンターテイメントをやりたい、ミュージカルやグレイテストショーマンをやりたいという子が多いです。そのことについてお話ししてみたいです。彼らから

その提案を受けたときは、エンターテイメントは難しいものだ、どこかから拾ってきた表現では立ち行かないから、自分自身や友達に向き合いなさいと言います。お二人はそのような欲求をどのように方向転換していますか？

スティーブ：シリアスなミュージカルを作ることもできるし、シリアスな問題を取り扱うミュージカルも作ることができると思う。ただ、彼らはシリアスなものに対して頭の中でわかつてリクエストしているわけではないと思う。新作を書いてもらうために、あのグループのために作品を書いてもらうよう依頼します。それに対して、若い人たちがフィードバックをします。かなりきついフィードバックだったりします。私たちが気をつけているのは、若者の声にきちんと耳を傾けられているかということです。使う言葉やトピックに。あとは、なるべく幅広いテーマやスタイルを扱うようにしています。2年参加したとしたら、シリアスな作品もコメディもやります。

レイチェル：ミュージカルをやったというお話をしましたが、若い人たちが自分がどこからきたか、ルーツへの誇りを若者の視点で捉えた作品でした。私たちが作った作品で、ものすごく特定のテーマを持った作品がありました。若者が、お金と社会的階級をどのように見ているかということを扱ったコメディでした。もう一つの作品は、よりダークなテーマを扱っていて、主役のキャラクターの声が奪われて、箱の中に閉じ込められてしまう。権力者が力を持っている世界で、声を取り戻して真実を告げるというテーマでした。この作品はコラボレーションによって生まれた作品で、若い脚本家、若い演出家と、私と、もう一人の演出家が関わって、出演者もちゃんとインプットできるようなスペースを残した状態で創作しました。

Q. 友人たちが作品を見ることは、ある種の衝撃があると思います。家族や友人たちが、どんな反応を示すか聞いてみたいです。

レイチェル：1番のメインは、誇らしく思うということ。彼らが成し遂げたことを初めて見る機会です。そこにあるもう一つの魔法は、若い人たちが舞台に立つときに、彼らは彼ら自身としてそこにいるのではなく、誰か他の人を演じているということです。スティーブ：家族が、子どもや若者が成し遂げるものを見ることは、とてもポジティブなこと。スコットランドで若者はとても難しい環境にいて、時に否定的な見方をされるので、彼らが舞台上で何かを成し遂げるところを見られるのは、素晴らしいことです。私が一番気に入っている反応は、観劇後にびっくりしたような声で、かなり良かったね～！と言われること。これだけやってきていまだにそのような反応をされるけど、好きです。もう一つ、若者の反応はとても正直なので、好きじゃなければ次はもう来ない。それでも足が向いているということが、その証拠になります。

Q. 次はこんなことをやりたい、というのはありますか？

スティーブ：ストレンジタウンが、私がいなくなっても続していくことが望みです。

レイチェル：自分のミッションを続けていくこと。人々に成長や可能性を与えられる芸術を作り続けることです。

スティーブ：ストレンジタウンの活動専用の建物が欲しい。この国の経済状況を見ると、実現は難しいですが一つの夢です。

レイチェル：私は楽観主義者なので、環境や経済が酷かったとしても、新たな転換の可能性を秘めていると思うので、若者がどこに連れてってくれるか楽しみです。

スティーブ：レイチェルが正しいといいなと思う。パンデミックの後に、若者のメンタルヘルスのための助成金を受け取ったりもした。政府も、若者たちは何かをすることが必要なんだと気づき始めている。

中山：いつかユースシアターのインターナショナルコラボレーションをやりたいです。

レイチェル&スティーブ：ぜひ頑張ってください。

Q. 日本では若者はオンラインのものに夢中になっていて、リアルの演劇に誘うことが難しいのではと思うのですが、同じ状況でしょうか？

レイチェル：若い人们は、同じような関心を持つ人たちと、オンラインではない実際の空間でつながりたいと自然に思っているのではと思います。トーンスピーカーには、学校や彼らの社会にフィットしなかった子たちが来ているということがあります。

スティーブ：仲間を作るということが大事だと思います。テクノロジーが一つの深刻な問題で、みんなそれを欲しがり、そこにいたがります。そこから離れる時間を作り、同じ状況にいるということを作ることが、これまでより更に重要になってくると思います。私の義理の息子は16歳ですが、彼はロックダウンとパンデミックをオンラインで過ごしました。彼は今ストレンジタウンのメンバーになっていて、他の子たちと一緒に過ごすことをやっています。

(聞き手 中山夏織／通訳 宮内奈緒／記録 加藤七穂)

## リアルで集まるユースシアターの重要性

加藤  
七穂



スティーブン・スモール氏は、さまざまな団体でユースシアターに携わり、2008年にエジンバラで自らのユースシアターである「ストレンジタウン」を立ち上げました。そこでは、8歳から27歳（パンデミック以前は25歳）までの幅広い年齢の若者たちが、週に1回、2時間程度のクラスに集まり、ゲームや脚本の稽古を通じて交流を深め、最終的にはエジンバラの劇場で公演を行います。参加の目的はそれぞれですが、俳優を育成することは目的ではなく、作品を作るなかで仲間と出会い、自信を身につけ、社会的なスキルを獲得していきます。そして家族や友人は、彼らが成し遂げる姿を舞台で目にすることができます。参加した若者は、「クラスに参加すると自分自身でいられる」と何度も言うそうです。彼らが毎週やってきて、自分自身になれる安全なスペースを作ることは、パンデミックを経た今、より重要となっています。一方、レイチエル・スミス女史の演出家、振付師、ダンサーとして活躍しながら、2012年より6年間「トゥーンスピーカー・ヤング・ピープル・シアター」で活動しました。当時は、グラスゴーの12の地域で毎週12のクラスを開催し、小さな公演を年3回ほど行なったそうです。活動していたのは、社会的にあまり恵まれていない地域で、参加し続けてもらうことや、関係性を保ち続けることが難しい環境でした。それでも若者たちに仕事につながるような機会を与え、彼らの精神的な健康をサポートすることにフォーカスし、参加費不要で、移動手段や食事も提供するといった献身的な活動を続けました。それによって創造的な芸術活動を通して、若い人たちの成長をより支える地盤ができ、公演の規模も大きくなっています。経済的バリアも身体的バリアもない活動を理念として、地域のユースワーカーやソーシャルワーカーとも連携しています。

参加者からの質疑応答を通じて、創作の過程でも、若者の声にきちんと耳が傾けられているかどうか、彼らが使う言葉や興味関心のあるトピック、視点が反映されているかどうかが大切にされていることがよくわかりました。また「演劇」という「作品を発表する」活動によって、参加する若者たちの家族や友人が、成果を目の当たりにできることがとても重要で、それが若者の誇りに繋がり、彼らが生きる環境にポジティブな反応を生み出します。国の予算や財政が厳しい状況においても、パンデミックによってさらに若者の孤立が進む現在においては、学校外で仲間と出会い、リアルで集まる「ユースシアター」の重要性が高まっていると感じられました。

その後、「クリエイティブユース多摩」が開催されました。演劇のワークショップの講師として鈴木アツトさん、ミュージカルの講師として大塚幸太さんをお招きし、10~17歳を対象とした各2日間のワークショップを実施しました。この夏では貴重な「対面」でのワークショップということもあり、実際には対象年齢を下回る8歳から17歳までの幅広い年代、また愛知や静岡など遠方からもご参加いただきました。初心者も経験者もいましたが、経験や年齢の差を感じさせず、初対面同士でも次第に打ち解けて、分け隔てなく作品作りに取り組んでいました。学校の外だからこそ、その時かぎりの仲間の前でなら少しくらい恥ずかしい思いをしたって気になりません。セリフや歌を声に出して表現することを通じて、相手に届くように発声することや、言葉を理解して自分なりに読み解くことといった、コミュニケーションの基礎になることを学んでいました。複数人で「作品」を形にしていくためには、周りを見て動くことや、セリフと動きなど複数の処理を同時にすることなど、社会的なスキルも必要とされます。演劇やミュージカルは、自分自身を解放して思いっきり表現できるだけでなく、コミュニケーション能力や将来に役立つ社会的なスキルの獲得にも役立ちます。彼らの2日間での大きな成長を目の当たりにして、それが強く実感できました。どんどん大きくなる声や動き、帰り際の彼らの充実した顔を見ても、こういった場をより多くの子どもたちへ提供することの重要性を強く感じました。（かとうななほ／演劇製作者）

## 編集後記

ものすごい勢いで感染が広がるなかで、地域文化俱楽部（仮称）創設支援事業を実施することが果たして賢明な選択なのかどうか、悩み続けました。りっかりっかフェスタで沖縄滞在中も、公演が実施できるかどうかに悩み苦しみながら－決して顔にはださないけれど同時に、ユースシアターの試みを実施できるのかどうか。

しかし、期日が近づくにつれて、申し込みが増え始めました。しかも、多摩地区のみならず、かなりの遠方からの参加者を受け付けるなかで、パンデミックの時期だからこそ、オンラインではない機会を提供しなければならないと考えるようになりました。とりわけ、学校とは離れた場所だということ、自分の意思で参加すること、そしてそれを親が容認し、ときに背中を押すということが大きな意味をもったように感じています。

鈴木アツさん、大塚幸太さんとも、子どもたちだからといって決して手を抜かず、真摯に向かい合っていただきました。アツさんのアシstantを務めていただいた中村真希子さんの安定感も、弱気になりがちな私を応援下さった多摩子ども劇場の柴田ゆきさん、このレベルのワークショップではありえない贅沢な音楽チーム「ふあり」の存在も大きな役割を果たしてくれました。子どもたちの笑顔と真摯な向き合い方、本プロジェクトに関わった全ての方々の子どもたちを見つめる暖かさに何かたしかな幸せを覚えました。心より御礼申し上げます。

さあ、「これから」をどうしていくのか？ このタネを適切に育てていくことができるのか。次の課題です。

沖縄公演を経て、ホスピタルシアター・プロジェクトも秋冬ツアーに向けて、再始動いたします。他の仕事との兼ね合いで、沖縄だけ参加というメンバーも少なからずいて、新メンバーも迎えることになり、どこか再創造が必要な状況にあります。文句を言うというよりは、俳優という仕事の特殊な性質を改めて思っています。

2022年9月末には、3年ぶりの「対面」による国際俳優連合(FIA)の理事国會議がondonにて開かれることになっています。私も久しぶりに参加させていただくことになりました。その準備は、まさに世界のなかであまりに特殊な日本のコンテクストを見つめなおし、整理して言語化することです。私の仕事の特殊性でもありますが、だからこそ生かされているのだと実感もするところです。（中山夏織）

## 特定非営利活動法人シアタープランニングネットワーク (TPN)

舞台芸術関連の様々な職業のためのセミナーやワークショップをはじめ、調査研究、情報サービス、コンサルティングなど、舞台芸術にかかるインフラストラクチャー確立をめざすヒューマン・ネットワークです。国際的な視野から、舞台芸術と社会との関係性の強化、舞台芸術関連の教育とトレーニングの理念構築と具現化、文化政策、アートマネジメントにかかる情報の共有化、そしてメインストリーム・シアターとコミュニティ・シアターの相互リンクを目的としています。障がい児・医療的ケア児とその家族のための多感覚演劇「ホスピタルシアター・プロジェクト」は、毎年、上演を続けています。1998年7月に活動をはじめ、2000年12月6日、東京都よりNPO法人として、認証され、12月11日、正式に設立されました。

### Theatre & Policy シアター・&ポリシー

TPNの基幹事業の一つとして、2000年6月から定期発行（隔月刊・年6回）しています。定期購読（準会員）をご希望の方は、下記の郵便振替口座まで「定期購読希望」とご記入の上、年会費3,000円をご送金ください。

郵便振替口座 00140-4-635280 加入者名 シアタープランニングネットワーク

発行編集人 中山 夏織

〒206-0033 東京都多摩市落合6-13-9-203

Phone & fax 042-316-9392 Mail [tpn1@msb.biglobe.ne.jp](mailto:tpn1@msb.biglobe.ne.jp)

<http://www5a.biglobe.ne.jp/~tpn>